

傍若無人、という表現がびつたりくる。

圭介は模造代理石の階段を降りながら思った。

サウンドのことだ。

重低音の16ビートが、ビルディングの一階から地下に続く通路全体を揺さぶっている。しかも音源はこのビルではなく、隣のビルの地下二階なのだ。

圭介とてディスコは嫌いではない。たまに興がのれば、最近ようやく増え始めた会員制の大人向けディスコに足を向けることもある。

問題は「箱」ではなく「客筋」である。いかに店側が内装に金をかけ、開店時のレセプションに有名人を呼んで箔をつけようと、ヘアリンスと防臭スプレーの匂いをふりまく若者たちが、あつという間に雰囲気を変えてしまうのだ。

若者が楽しむのは悪いことではない。だが多過ぎるのは問題だ。

階段を降りきった圭介は眉をひそめて考えた。厚いカーペットをしきつめた店の入口には、タクシーを着た男が立って、圭介を値踏みするように見上げている。

銀座が爺いどもに、新宿は田舎のつっぽり坊主どもに、六本木が遊び人を気どる青臭いじやりにどもに占領されてしまつては、行く場所がない。

「おひとりですか」

タクシーの男が進み出て訊ねた。この男も、そうしたじやりどもの侵蝕から、精一杯店を守ろうとしているのか。圭介はじやりには見えないはずだ。

「待ち合わせだ」

圭介は答えた。

「どっぞ」

“Neptune”と金文字が筆記体で描かれたガラス扉を、男は押した。

カーペットの厚みが一センチほど増したようだ。別に礼をいうでもなく、のっそりと圭介は足を踏み入れた。決して圭介の動きが鈍いということではない。

百八十五センチの長身にしては、実に滑らかで無駄のない動きを、圭介はする。

あまり上手ではないピアノの弾き語りとは、これは食欲をそそる、中国料理の香りが、耳と鼻に入りこんだ。目は、暗い店内に慣れるまで他の器官にわずかの間、遅れをとった。

正面がバーコーナーで、グラランドピアノを楕円型のカウンターが囲んでいる。両側が客席だった。各々のテーブルの横に並べられたスタンドが、料理の品々を淡く照らしている。

白衣を着たボーイが、トレイののったワゴンを押して動き回っていた。

左の奥の席でグレイの袖がふられた。それを認めた圭介は、別に急ぐでもなく足を進めた。

テーブルには三組の皿とビール、そしてピータン、水母などを中心にしたオードブルの大皿が並んでいた。二人の男が圭介を見上げる。一人は圭介と大学時代、同じクラスだった河合、もうひとりとは六十を越していると思われる老人だった。

河合は度の強いメタルフレームの奥から圭介に微笑みかけた。

「やあ、高松。久しぶりだ、元気かい」

ナプキンをつかんで腰をおろすと、圭介は頷いた。

「御覧の通りだ」

老人は淡いブルーのジャケットにオフホワイトのスラックスを着け、麻シャツの襟を開いていた。気障だが、嫌味のないスタイルだった。そこに白の綿スラックスとネイビーブルーのブレザー姿の圭介が加わり、グレイの地味なスーツにタイをしめた河合の姿が、ひとり浮かびあがる。

「先生、彼が先ほどお話ししました友人の高松圭介くんです」

老人は興味深げに圭介を見守っていたが、河合の言葉には、ふりむきもせず素気なく頷いたきりだった。

「高松、こちらは辺見俊悟先生だ」

辺見の名を告げられても圭介の顔には変化がなかった。河合は文映社という出版社につとめている。で、圭介はいった。

「すると、作家の先生かな」

老人の鉤鼻の上にある、茶がかつた瞳に火花が散った。だが一瞬で消えると、面白がっているような色に変わった。

何かいいかけた河合を制して、辺見はいった。

「ふん。君はあまり本は読まんらしいな」

じろじろと自分を見つめる辺見を、圭介は同様にじろじろと見返した。格好から見ても、この老人が金に困っていないことは確かだ。そこいらの企業を停年退職した雇われ役員あたりには、とても手が届かぬなりをしている。家のローンにも、子供の養育費にも、追われた経験はないにちがいない。お洒落を含めて、自分を磨く作業には、しこたま金をかけている。貧乏作家あがりではない。もし、そうだとしたら、それはずっと昔の話だ。

「本は読む。だが小説はあまり読まない」

辺見の目にもう一度火花が散った。圭介の口調にこもった、わずかな侮蔑の匂いを嗅ぎとつたのだ。河合が焦って身をのりだした。

「高松、辺見先生は大変立派な作品をお書きになられている。『陰の間』という名を聞いたことはあるだろう」

「あるような気がする」

「先生の作品だ」

「なるほど。で？」

「で、とは？」

「その大先生と君が、何の用で俺を呼び出した。小説のネタにはならんぜ、俺は」
 辺見は椅子に背をあずけ、興味を感じたような顔つきで圭介を見守っていた。

「まあ、飯でも食いながら話そう」

河合はいつてボーイに手を振った。

「この北京ダックは結構いけるんだ」

フカヒレとカニの肉を煮こんだスープが運ばれてきた。ボーイが碗にとり分ける。

辺見が身を起こし、ひとさじすくうといった。

「君は何でもやるそうだな。暇つぶしになることなら」

「余計なお世話だ」

「なんだと？」

「高松！」

「人殺し、かっぱらい、売春、麻薬の売買、これはやらない。スポーツ、ギャンブル、酒、煙草、女、はやる」

「それ以外のものはどうなのだ」

辺見は尊大な口調で訊ねた。

「時と場合、だな。興味を感じれば」

「なるほど。結婚はしておらんのか」

この続きは、書籍でお楽しみください。

◎注意

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。

個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。